戊辰戦争と甲陽鎮撫隊

錦絵「勝沼駅近藤勇驍勇之図」（月岡芳年画、1880年、東京都江戸東京博物館蔵）

鳥羽・伏見の戦いにおいて敗れた新選組は、幕府軍艦で江戸に戻る。近藤・土方は富士山丸に乗艦している。江戸鍛冶橋門外（東京都千代田区）の秋月種樹邸を屯所とする[58]。永倉新八「浪士文久報国記事」『新選組日記』によれば、近藤は江戸帰還後に徳川慶喜に対して甲斐国甲府の甲府城（山梨県甲府市）の委任を要請する建白書を提出した[58]。

2月28日、近藤は幕府から「甲陽鎮撫」を命じられ、幕府から武器弾薬を、幕府や会津藩から資金を与えられると3月、近藤は「**大久保剛**」の変名を用いて新選組は甲陽鎮撫隊と改名した[59]。また、日野宿では佐藤彦五郎が一行に加わっている[60]。一行は3月1日に江戸鍛冶橋屋敷を出立すると甲州街道を甲府へ出陣、途中、近藤の故郷である上石原宿に立ち寄り、西光寺向かいにあった名主・中村勘六の民家で歓待を受け、しばし休息した[61]。一方の新政府軍も岩倉具定が東山道先方総督軍を率いて信濃国諏訪から中山道・甲州街道に分かれて江戸へ進軍していた[60]。近藤は3月4日に花咲宿（山梨県大月市）において東山道先鋒総督参謀・板垣退助の率いる迅衝隊が甲府を制圧したことを知り[62]、3月6日に甲州市勝沼町において勃発した甲州勝沼の戦い（柏尾戦争）で迅衝隊と戦うが敗れて敗走する[63]。

幕府指示による五兵衛新田での待機と再編

近藤勇・土方歳三らは勝沼敗戦後、3月8日に八王子宿（東京都八王子市）へ退いた。永倉新八・原田左之助は甲陽鎮撫隊として勝沼の戦いまで近藤と行動を共にしたが、敗戦後は江戸へ戻り、3月11日に江戸和泉橋医学所で近藤と再会したとされる[64]。

近藤・土方は会津行きに備えて隊を再編成し、幕府陸軍隊長佐々井半十郎の指示により、3月13日から4月1日まで下総国葛飾郡五兵衛新田（現在の東京都足立区綾瀬付近）に滞在した。この滞在は佐々井が「大久保大和（近藤勇の別名）」宛に送った書状（金子家文書）により確認され、幕府の正式な待機命令であったことが裏付けられる。五兵衛新田の農家は幕府への忠誠心から新選組を支援し、金子家は屯所として隊士を受け入れた。旧幕府歩兵らの募集も行われ、隊士は227名に増加した。この期間に隊の再編と増員が進められ、流山への移動に際して近藤は金子家に自身の写真と金二千疋を渡したと伝えられている[65]。

江戸城無血開城と流山移動

3月14日、西郷隆盛と勝海舟が会談し、これに先立って山岡鉄舟が徳川慶喜の助命嘆願と江戸不戦開城の交渉を行った。こうした調整が進む中、旧幕府の武装勢力は新政府軍から武装解除と江戸退去を求められる立場となり、江戸市中にとどまることが困難になった。4月1日、近藤は五兵衛新田を出立し、下総国流山（千葉県流山市）へ移動した。流山へ移動した背景については諸説あり、旧幕府側が江戸城の無血開城に向けて新政府軍との衝突を避けるための措置であったと解釈されることもある。これは情勢判断によるもので、逃亡ではなく旧幕府方の再編行動の一環であったとされる[65]。

4月11日、西郷隆盛と勝海舟の会談を経た交渉の結果、江戸城は無血で明け渡された。これにより、江戸における旧幕府軍は武器・弾薬を新政府軍に引き渡し、事実上武装解除されることとなった[66]。

流山での屯集と捕縛

4月、新選組は下総国流山に屯集し、4月1日・2日には光明院・流山寺に分宿し、近藤・土方は長岡七郎兵衛宅を本陣としていた[67]。

一方、新政府軍は3月13日に板橋宿（東京都板橋区）へ進出し、総督内参謀の香川敬三が大軍監として日光街道を北上し、4月2日には糟壁（埼玉県春日部市）に到達していた[68]。

新政府軍は、流山に集結した新選組が旧幕府勢力と連携して行動する可能性を警戒し、4月3日に近藤勇を捕縛した。捕縛の経緯については史料により異なり、越谷の政府軍本営へ自ら出頭したとする記録も存在する[69]。

太政官日誌「慶応四年閏四月第十三」に記された、大久保大和（近藤勇）の流山での捕縛記事。

太政官日誌では、当初「賊長」を徳川慶喜としていたが、慶応4年閏4月以降の記事では近藤勇（大久保大和）を賊徒の首領として扱うようになっている。これは、新政府が旧幕府勢力の実質的な指揮者を近藤と認識し、処断の正当性を示すために賊長の位置づけを変更したと解釈されることがある。一方、新政府軍は3月13日に板橋宿（東京都板橋区）へ進出し、総督内参謀の香川敬三が大軍監として日光街道を北上し、4月2日には糟壁（埼玉県春日部市）に到達していた。新政府軍は、流山に集結した新選組が旧幕府勢力と連携して行動する可能性を警戒し、4月3日に近藤勇を捕縛した。捕縛の経緯については史料により異なり、越谷の政府軍本営へ自ら出頭したとする記録も存在する。太政官日誌では、当初「賊長」を徳川慶喜としていたが、慶応4年閏4月以降の記事では近藤勇（大久保大和）を賊徒の首領として扱うようになっている。これは、新政府が旧幕府勢力の実質的な指揮者を近藤と認識し、処断の正当性を示すために賊長の位置づけを変更したと解釈されることがある[70]。

板橋宿への移送と取り調べ

太政官日誌「慶応四年戊辰夏五月第一六」には、近藤勇の処刑に至る経緯が記録されている。

流山で捕縛された後、大久保大和（近藤勇）であることを知る者が新政府軍側にいたため、近藤は総督府が置かれた板橋宿へ移送された。近藤は板橋宿平尾の脇本陣豊田家に幽閉され、板橋宿本陣で連日取り調べを受けた。近藤は「大久保大和」と名乗っていたが、後年の伝承では、元隊士で御陵衛士だった加納鷲雄・清原清が正体を見破ったとされる。しかし、この説を裏付ける一次史料は確認されていない[71]。

板橋での処刑とその後

近藤の処遇については、後年の研究や小説などで「土佐藩（谷干城）と薩摩藩の間で意見が対立した」とする説もあるが、これを裏付ける一次史料は確認されていない。太政官日誌および東山道先鋒総督府の記録では、近藤の処刑は現地総督府（板垣退助ら）による軍事判断として

決定されたことが記されており、薩摩藩が処遇に関与したことを示す記録は残されていない[72]。

慶応4年4月25日（1868年5月17日）、近藤は中山道板橋宿近くの板橋刑場[注釈 1]で横倉喜三次・石原甚五郎によって斬首された（享年35）。

太政官日誌では近藤を「大和（大久保大和）」と記し、閏4月には「賊魁 近藤勇 事 大久保大和」、同年5月には「賊長 新選組 近藤勇 事 大和」と表記しており、新政府が近藤を重要人物として扱っていたことがうかがえる[73]。

首は京都三条河原で梟首されたが、その後の行方は確定していない。

太政官日誌に記された近藤勇処刑記事（前半）

太政官日誌に記された近藤勇処刑記事（後半）

墓所

龍源寺にある近藤勇の墓

- 東京都北区の板橋駅東口前の寿徳寺境外墓地（永倉新八により建立。処刑場の近隣）板橋刑場跡の近くに位置し、明治9年に永倉新八が発起人となり、旧幕府典医松本良順の協力を得て建立された「近藤勇と新選組隊士供養塔」がある。塔の側面には新選組に関わった110名の名が刻まれており、新選組最初期の供養塔として学術的価値が高く、北区指定文化財となっている。同じ区画には、永倉が建立した近藤勇の供養墓、永倉自身の墓（こちらの方が大きく目立つ）、土方歳三の慰霊碑、新撰組慰霊塔などが並んでいる。近藤の命日にあたる4月25日またはその直前の日曜日には、寿徳寺と「近藤勇と新選組隊士の墓保存会」によって墓前供養祭が例年行われている。
- 東京都三鷹市の龍源寺（上述の出身地、現：調布市野水のすぐ近く。）近藤勇の墓所。墓地に入ってすぐ右側に看板があり近藤一族の墓が5基並んでおり、右から2基目が近藤勇の墓（東京都指定文化財）。墓碑は近藤家の養子で甥にあたる近藤勇五郎によって建立された。境内には辞世の句碑もある。門前には近藤勇胸像がある。

- 福島県会津若松市の天寧寺 近藤勇の供養墓があり、遺体の一部が葬られたと伝えられている。天寧寺では毎年4月25日に近藤の追善供養の墓前祭が行われている。また、2020年には会津若松ライオンズクラブが60周年記念事業として、近藤勇の墓碑の隣に土方歳三の慰霊碑が建立された[74]。
- 山形県米沢市の高国寺（近藤の従兄弟・近藤金太郎が首をひそかに持ち帰り埋葬）
- 愛知県岡崎市の法蔵寺にも「近藤勇首塚」がある。

毎年、民間団体が近藤を弔うために「近藤勇忌」を流山市や会津若松などで行っている。

戒名は貫天院殿純忠誠義大居士。

辞世

辞世の句は漢詩（七言律詩）で作られており、この句が刻まれた句碑が龍源寺境内の墓所にある。

> 孤軍援絶作囚俘　顧念君恩涙更流
> 一片丹衷能殉節　睢陽千古是吾儔
>
> **（書き下し文）**
>
> 孤軍援（たす）け絶えて俘囚となる　顧みて君恩を思へば涙更に流る
> 一片の丹衷能（よ）く節に殉ず　睢陽は千古是れ吾が儔（ともがら）
>
> 靡他今日復何言　取義捨生吾所尊
> 快受電光三尺劒　只將一死報君恩
>
> **（書き下し文）**
>
> 他に靡き今日復（ま）た何をか言はん　義を取り生を捨つるは吾が尊ぶ所
> 快く受けん電光三尺の剣　只に一死をもって君恩に報いん

親族

- 実父：宮川久次郎
- 実母：宮川みよ
  - 姉：宮川リエ
  - 長兄：宮川音五郎（1830-1871）
    - 甥・婿養子：近藤勇五郎（1851-1933）勇の長兄である音五郎の次男で、勇の娘であるたまの夫。勇の刑死後、近藤家に婿入り[7]。

- 次兄：宮川粂次郎（1832-1875）
- **本人：宮川勝五郎**（1834-1868）近藤周斎に養子入りし、**「近藤勇」**となる。
- 正妻：松井つね（1837-1892）
  - 娘：近藤たま（1862-1886）勇の甥である勇五郎（勇の兄である音五郎の次男）の妻[7]。
    - 孫：近藤久太郎（1883-1905）勇五郎とたまの長男。日露戦争で戦死。これにより、勇の嫡流子孫は断絶した。
- 妾：駒野
  - 息子：のちに僧籍。
- 妾：お考
  - 娘：お勇
- 妾：およし
  - 息子：？

その他にも勇は朝鮮人貿易商との間に男子3人がおり、久太郎の他にも孫がいる。

宮川家は代々農家を続けており、現在の末裔も都内で農家を営んでいる。一族である宮川清蔵氏は天然理心流9代宗家となっている[75]。

逸話

- 源義経、楠木正成などの武将が登場する軍談を読み聞かせられて育った。特に三国志演義の関羽に憧れていたと伝わる。
- 加藤清正を尊敬し、同じく口から拳骨を出し入れできた加藤清正の真似をして「清正公のように出世したいものだ」と語ったという。
- 近藤の生家（現野川公園入口付近）は明治以降も現存していたが、太平洋戦争中の調布飛行場延長工事により取り壊され、井戸と近藤勇を祀った小さな神社がある。
- たまごふわふわと呼ばれる、静岡県袋井市の郷土料理を好んだとされることもあるが、それは大河ドラマ『新選組！』の近藤勇の設定であり史実の近藤勇の逸話ではない[76]。
- 平成23年（2011年）10月、頼山陽流の漢詩掛け軸が見つかり報道された。その句は「只應晦迹寓牆東、喋喋何隨世俗同。果識英雄心上事、不英雄處是英雄」である（画像 (http://www.jiji.com/news/photos/photo_news/images/450/view1492290.jpg)）。

  > 書き下せば「只だ應に迹を晦まして牆東に寓すべし、喋喋何ぞ世俗に隨って同じからん。果たして英雄の心の上の事を識らば、英雄ならざる處ぞ是れ英雄。」、現代語訳は、「ひたすら隠者生活を送るべきであり、喋喋と政治を議論する俗人と同じではない。もし英雄の心が理解されるならば、英雄らしからぬことこそ英雄（なのである）」となる[77]。

出典：Wikipedia「近藤勇」（CC BY-SA 4.0）著者：ウィキペディアンコミュニティ
URL：https://ja.wikipedia.org/wiki/近藤勇　※脚注・参考文献一覧は省略しています。